

# 国際草地学会報告

## 第13回国際草地会議に出席して

大原久友（帯広畜産大学名誉教授）

### 1. 会議に出席するまで

ソ連のモスクワで開催された第12回国際草地会議の総会において次回の会議をドイツで開催したいという提案があったが、ドイツは東と西に分かれているのでむつかしい問題が生じた。しかし、総会における緊急動議によって参加者の挙手を求めて開催を東ドイツで行うという従来の慣行と異なるプロセスで決まっただけである。筆者にも開催要領の案内があり、都合がつけば出席したいと思い、一応発表予定の論文を事務局に提出して置いた。ソ連に引きつづき社会主義国の東欧諸国での開催ではあるが、最近のこれら諸国における草地の研究、技術的發展、草地利用の実態を知りたいという熱望もあったし、関係方面の理解ある取り計いによって出席することにした。しかし、出席決定の意志の決まったのは会議開催期日の直前であったので直接東ドイツ大使館と連絡し手続きを進めた。最近の筆者は気管支喘息によるドクターストップの身でもあったので家内を連れて参加することにしたのである。しかし、この国の査証は他の国と異なる手続きが必要であり、筆者の渡航承認は比較的早く順調にとることができたが、家内の方は出発少し前に本国政府よりの電報で承認されたのである。そこで開催の前々日、JALで東京から5月17日午前11時空路モスクワに向い、空港待合室で4時間ほど休憩の後、東ドイツ航空機で2時間ほど乗って19時40分東ベルリン空港に到着した。東から西に飛ぶのでこの時でもまだ薄暗い位であるが、朝東京で起床してから20時間位目をさましていることになる。乗客のうち日本人は私と家内だけであったが、まず通関でストップをかけられた。理由は家内の入国の確認と入国料の支払の件である。証明になるのは本国政府からの電報であるが、まずこれは政府と連絡をとってチェックし、ついで入国料についてはドルを東ドイツ貨幣に両替していないのでここでもひっかかり、ようやくドル払いが認められ、結局空港の通関に約1時間を要したことになったのである。やれやれと思って出口の荷物受取所にいってみると我々のトランク2つが主待ちの姿で置かれていたが、トランクも主がこないで淋しかったであろうと思った。初めは東ベルリンに1泊のつもりだったが、この頃丁度東ベルリンで国際労働者会議が開催されており、この方は内外からの参加者3,000名という規模の大きいものであり、東ベルリンには私達を泊めるホテルがないということで空港待合室にいた会議連絡係が私にこれから汽車で開催地のライプチヒ市に行くように話してくれたが、これは大変なことになったと思った。そこで空港から駅までバスに乗り（バスに乗った時間は僅かに3分位）、そこで駅の大きな階段をのぼってプラットホームに行くのである。この階段があまりにも高く、不眠の長旅でいささか疲れ、休み休み登っていったとき、身体

の丈夫な青年が一寸寄ってきて私と家内の2つのトランクを軽々とプラットホームまで持っていったのには感謝とともに力強い親切な青年だなあと思ったのがこの国の土を踏んでの第一印象であった。あとで感じたことであるが、この青年の力のみなぎった体力と親切な心は食べものの栄養に由来する身心の強靱さ、さらにその内容はカルシウムを始めとする栄養分に富む牛乳を多く飲んでいること、そしてこの高栄養の牛乳は栄養の多い草の変化したものであり、この草は豊かな土に育ったものということを実際に知ったのである。この青年の真心こもった行為は誠に小さな出来事であったかも知れないが、まだ病身の、しかも疲れ切った異国への第一歩の私にとってはたとえようのない感激であったのである。私なりに解釈すると、この青年の親切←身心の健康←牛乳からのカルシウム、蛋白質など←栄養分のある、とくにカルシウム分などの多いアルファルファ←肥沃な土という一連の関連を想像させたのである。さて特急車はガラ空きというほど客は少ない。

最近の日本の汽車と同じである。近くの座席には年老いたばあさんと娘などの一家族が乗っているし、となりの客室では若い人達が酒を飲んで楽しんでいる。目的地のライプチヒ駅まで2時間かかるのとことであるが、外はもう真暗である。停車駅も少なく、駅につくと駅員が駅名を呼んでいるが何しろ初めての国なので勝手がよく分からない。となりのばあさんにライプチヒ駅は何番目に止まるかと聞いて大体の見当をつける位である。ようやく駅につくと数人の会議事務局の人が、プラットホームにいて私達のとまるホテルまで案内するといつて駅前のホテルに荷物をもっていってくれ、よく名簿をみると私達のとまるホテルは別のところであり、事務局員からいまタクシーを呼ぶからそこに待っているようにいわれた。タクシーがくるのに30分位かかるだろうとことであったが、割合に早くきて乗ってみると僅かに5分位のところにあるホテルアムリングというところであった。部屋に入ってみると意外に広く、設備もよく、清潔であるのにほっとしたが、このホテルは市の中心にあり、向いがライプチヒ大学、となりに中央郵便局、大きな広場があってオペラハウスなどもあり便利のよいところである。ようやくベットにもぐりこんだのは東京で目を覚ましてから優に24時間はすぎている1日としては超ロングランの旅であった。

朝食はバイキング方式であるが、このホテルの朝食の栄養的なにはびっくりさせられた。

とくに肉製品のハム類(6種位)とか、コンビーフ、乳製品のチーズ(これもブルーとか、ゴーダなど3種類位)、それに卵、ミルクおよび果汁など盛沢山の栄養のあるものであり、単調な洋食の多い中において、酪農食とか畜産食を主体にした食事のみで、この国のパワー源を感じさせるものであった。朝食後、会場に行き、一切の登録をすませ、参加費、イヤホン代、ホテル代、食事などの各種の切符をもらって会議に臨んだのである。会期は5月18日~27日に至る10日間である。

## 2. 開 会 式

ソ連の場合と同じように政府および会議の関係者がひな壇にならび農林大臣などの挨拶があった。

### 3. 特別講演

東ドイツ、ソ連から2編、インド、オランダ、キューバ、エチオピア、ナイジェリア、オーストラリア、カナダ、スイス、チェコスロバキアから各1編の計14編である。世界の環境条件の異なる地域における草地の特性についてのものが多い。日本に知られているオランダの Th, ALBERDA 教授、スイスの CAPUTA 博士なども講演を行った。

### 4. 一般講演

14の部門に分かれて発表があった。

- 1) イネ科牧草およびマメ科牧草の収量に及ぼす生物学的基礎
- 2) 牧草の育種および採種
- 3) いろいろな気象条件下における草地管理の生態および環境問題
- 4) ツンドラ、山岳地帯における草地の造成および有効利用
- 5) 乾燥地帯における草地の改良および有効利用
- 6) 湿潤および半湿潤地帯における放牧地、採草地の集約利用
- 7) 草地の施肥および水の管理
- 8) 草地における牧草の病気、有害植物およびその除去
- 9) 牧草貯蔵の生物学的基礎および技術
- 10) 牧草の品質および評価

### 5. 見学・旅行

会議の前後・期間中に視察旅行が行われたが、期間中は農業展示会場における草地関係の展示、とくに移動式のスタンドで牧草・飼料作物の草種、品種の視察、ヘリコプターによる施肥、灌水装置など機動的なものであった。視察は大きな国営農場・集団農場のある地域における指導体制、灌漑用水の揚水装置、アルファルファペレット工場、さらに生々しい戦火の跡が残っているドレスデン市視察などが主なものである。また会議の合い間にはライプチヒ市内を主として市電（安くて便利）を用いて視察することができたし、いくつかの歓迎レセプションもあった。

### 6. 会議が終了してから

東ドイツは筆者の相像以上に草が乳・肉を通じて国民の体位向上に役立ち、この国の力をみせてくれたが、一般にヨーロッパ諸国はすべて日本人の数倍の牛乳・乳製品を摂取し、常食となっているが、その根源は全く良質の草に依存していることを痛感し、会議後いくつかの国々をみて約1ヶ月の旅を終え帰国したのである。